

13 正規直交基と直交行列

ここでは V は内積空間とする .

13.1 正規直交基

定義 13.1 次の条件を満たす V の基 $\{v_1, \dots, v_n\}$ を V の正規直交基という .

$$(u_i, u_j) = \delta_{ij} = \begin{cases} 1, & i = j \text{ のとき,} \\ 0, & i \neq j \text{ のとき,} \end{cases}$$

右辺の δ_{ij} はクロネッカーのデルタと呼ばれる .

正規直交基は , V の任意の基を使って作ることができる . その方法がシュミットの直交化法として知られている .

定理 13.1 (シュミットの直交化, 教科書 p.116, 定理 6.2.1)

V の基 $\{v_1, \dots, v_n\}$ に対して V の正規直交基 $\{u_1, \dots, u_n\}$ を任意の $1 \leq r \leq n$ に対して

$$\langle u_1, \dots, u_r \rangle = \langle v_1, \dots, v_r \rangle$$

を満たすようにとることができる . とくに有限次元の内積空間は正規直交基を必ず持つ .

証明 まず $u_1 = v_1 / \|v_1\|$ とおく . $\|u_1\| = 1$ である . $v'_2 = v_2 - (u_1, v_2)u_1$ とおき , $u_2 = v'_2 / \|v'_2\|$ と長さを 1 に正規化する .

$$(u_1, u_2) = \frac{1}{\|v'_2\|} [(u_1, v_2) - (u_1, v_2)(u_1, u_1)] = 0.$$

これを続けて $r < n$ まで u_1, \dots, u_r が求まったとする .

$$v'_{r+1} = v_{r+1} - \sum_{i=1}^r (v_{r+1}, u_i)u_i$$

とおき , $u_{r+1} = v'_{r+1} / \|v'_{r+1}\|$ と正規化する . v_1, \dots, v_{r+1} が 1 次独立だから $v'_{r+1} \neq 0$ がわかる . $1 \leq j \leq r$ のとき ,

$$(v'_{r+1}, u_j) = (v_{r+1}, u_j) - (v_{r+1}, u_j) = 0$$

より, \mathbf{u}_{r+1} は $\{\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r\}$ と直交している. また, 作り方から明らかに \mathbf{v}_{r+1} は $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_{r+1}$ の一次結合で書け,

$$\mathbf{u}_j \in \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_{r+1} \rangle$$

が $1 \leq j \leq r+1$ で正しい. よって

$$\langle \mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_r \rangle = \langle \mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_r \rangle.$$

□

例 13.1 (教科書 p.117, 例題 6.2.1)

シュミットの正規直交化を用いて \mathbb{R}^3 の次の基を正規直交化せよ.

$$\{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \mathbf{v}_3\} = \left\{ \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 3 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix} \right\}$$

解 $\|\mathbf{v}_1\| = \sqrt{2}$ だから,

$$\mathbf{u}_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$$

となり, $(\mathbf{v}_2, \mathbf{u}_1) = \frac{1}{\sqrt{2}}(1+3) = \frac{4}{\sqrt{2}}$ だから,

$$\mathbf{v}'_2 = \mathbf{v}_2 - \frac{4}{\sqrt{2}}\mathbf{u}_1 = \begin{pmatrix} 1-2 \\ 3-2 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}.$$

ゆえに $\|\mathbf{v}'_2\| = \sqrt{3}$ で

$$\mathbf{u}_2 = \frac{1}{\sqrt{3}} \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}.$$

次に

$$(\mathbf{v}_3, \mathbf{u}_1) = \frac{1}{\sqrt{2}}(2-1) = \frac{1}{\sqrt{2}}, \quad (\mathbf{v}_3, \mathbf{u}_2) = \frac{1}{\sqrt{3}}(-2-1+1) = \frac{-2}{\sqrt{3}}$$

なので,

$$\mathbf{v}'_3 = \mathbf{v}_3 - \frac{1}{\sqrt{2}}\mathbf{u}_1 + \frac{2}{\sqrt{3}}\mathbf{u}_2 = \frac{5}{6} \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{pmatrix}$$

で, $\|\mathbf{v}'_3\| = \frac{5}{6}\sqrt{6} = \frac{5}{\sqrt{6}}$ となり,

$$\mathbf{u}_3 = \frac{1}{\sqrt{6}} \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{pmatrix}$$

この $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \mathbf{u}_3$ が正規直交系になる.

13.2 直交行列

定義 13.2 n 次の実正方行列 P が直交行列であるとは,

$${}^t P P = E_n$$

を満たすときに言う. このとき P は正則で $P^{-1} = {}^t P$ である.

定理 13.2 n 次の実正方行列を $A = [\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n]$ と列ベクトル表示すると,

$$A \text{ が直交行列} \Leftrightarrow \{\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n\} \text{ が正規直交系}$$

証明 $\{\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n\}$ が正規直交系ならば

$${}^t A = \begin{bmatrix} {}^t \mathbf{a}_1 \\ {}^t \mathbf{a}_2 \\ \vdots \\ {}^t \mathbf{a}_n \end{bmatrix}$$

で, ${}^t A A$ の成分は ${}^t \mathbf{a}_i \mathbf{a}_j = (\mathbf{a}_i, \mathbf{a}_j) = \delta_{ij}$ なので, A が直交行列であることがわかる. 逆もこれを逆にたどれば良い. \square

練習 13.1 (今日の練習問題ではありません) 次の行列は直交行列であることを示せ

$$A = \begin{pmatrix} \frac{1}{\sqrt{3}} & 0 & \frac{2}{\sqrt{6}} \\ \frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{2}} & -\frac{1}{\sqrt{6}} \\ -\frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{2}} & \frac{1}{\sqrt{6}} \end{pmatrix}, \quad B = \begin{pmatrix} \cos \phi & -\sin \phi & 0 \\ \cos \theta \sin \phi & \cos \theta \cos \phi & -\sin \theta \\ \sin \theta \sin \phi & \sin \theta \cos \phi & \cos \theta \end{pmatrix}$$